

第2回野生イノシシ豚熱対策検討会概要

日時 : 2022年3月29日(火)14:00~17:00

場所 : Web会議

出席者 : 青木委員、呉委員、國保委員、迫田委員、津田委員、早山委員、江口委員、小寺委員、鈴木委員、平田委員、鴨川委員、小出委員、杉下委員、則久委員、阿部委員代理

概要 : 議事次第に基づき進行。野外散布指針の改訂案、野生イノシシにおける豚熱対策の対応方向、アフリカ豚熱の今後の対応等について了承された。主な論点は、以下のとおり。

- 野生イノシシにおいては令和4年3月にこれまでの発生地点より西に280kmも離れている山口県及び広島県で確認されている。このような状況の中、山陽地方、四国地方、九州地方の一部の県でサーベイランス検査数が不足していることから、経口ワクチン散布等の野生イノシシにおける豚熱対策に関する戦略等を立てる上で、早急にこれらの検査数が十分ではない地域の検査数を増加させることが必要。
- サーベイランス結果については、対策を検討する上で重要な情報であり、検査の強化とともに、引き続き詳細な分析を行うことが必要。一方で、タイムリーな情報を都道府県、生産者、獣医師等の関係者に分かりやすい形で提供し、生産者自身が自らの農場周囲等の感染状況を正確に認識することも重要。
- 山口県の野生イノシシで確認された豚熱ウイルスの遺伝子解析の結果、紀伊半島東部で確認されているウイルスと遺伝的に近縁であることが確認された。野生イノシシにおける豚熱の遠方への拡大については、野生イノシシだけでなく、狩猟者や旅行者といった人や物を介した運搬による拡大も疑われる。狩猟者の交差汚染防止に加え、一般旅行者、入山者等への情報提供や注意喚起をより強化していくことが必要。
- 野生イノシシにおいては、直近の山口県での豚熱の発生でもそうであったように、死亡個体を検査した方が捕獲個体を検査した場合より陽性となる場合が多く、死亡個体の積極的な検査が重要。アフリカ豚熱についても同様であることから、死亡個体の通報体制については、通報への協力の呼びかけや連絡先窓口の周知徹底が非常に重要。国・自治体において、関係部局がより連携を強化することが必要。
- 経口ワクチンについては、感染減少地域においても一定割合の免疫獲得個体が維持できているとサーベイランスデータからも示唆される。この割合を維持し、さらに上げていくためにも、散布方法について、引き続き実証試験等を継続しつつ、効果的なものについては積極的かつ迅速に現場に実装していくことが重要。また、経口ワクチンの内製化についても推進が必要。
- アフリカ豚熱については、現在国内での発生は確認されていないが、万一の侵入時には、早期発見及び初動対応が非常に重要となる。野生イノシシの死体処理や関係部局間の連携強化に関する通知等を通じて、国と県の関係部局の連携をさらに強化し、発生確認時の初動対応について演習等を実施し、確実に整備しておくことで、必要時に迅速に対応できる体制を構築することが必要。海外の事例も参考に、具体的な措置について今後検討が必要。